

菊池短歌会

9月詠草

庭隅に自生の南瓜青き実の太るを楽しみ恙なき夏
籠もる間に庭の雑草丈なせり闘志あらわに鎌握り
しむ 氏岡 百枝
辿り来し阿蘇高原は秋めきて風のままなる撫子の
花 梅田 昭子
曇りたる拡大鏡を拭ひつつ今朝の新聞拾ひ読みす
る 梅野かをり
ゆくりなくも失せし扉の鍵出て来たり秋の空いま
澄みて広がる 古賀 勝士
病む夫の窓もすでなる晩夏光眠れば告げて田まわ
りに出づ 竹野美智代
静かなる朝の日差し葉木蓮かそか風あり青きか
がやき 中川アイ子
身の廻り殖ゆるもありて孫がくれし大瓢箪部屋
に位置しむ 中原ちえ子
道のべの花のひとつは夜を待てり内省ひと灯し
咲くべし 怒留湯健替
動くものすべて「マリオ」の玩具なり雨の一日子
猫とすこす 余語やす子



万句の里俳句会

9月句会

濃く淡く風が織りなす秋桜
庭の闇集めて虫の宿となる
濁りてもすぐに水澄む鯉の池
白鷺の微動だにせず水の秋
秋冷の五感にふれる朝散歩
朝露に濡れて佛の花を剪る
彼岸花はや色失せてをりにけり
真夜の雲払いし今日の月仰ぐ
秋の水かたち崩さず流れけり
たづさふる友の手に凭る秋思かな
秋明菊一つ咲く時風あらた
大阿蘇の端に住み古り獺祭忌
富田 幸子
松永 久子
中路 郁子
田中ひさ子
東 鈴子
稲田 羚子
大山 厚子
梅田 昭子
光本とよいち
小山 照子
田中 美智
吉井 綾子

肥後狂句桜会

例会入選句集より

参加賞 野菜と聞いて飛び入らず
参加賞 病院行きのおまけ付き
たじたじ 起きて待つとる山の神
たじたじ 一手も打てん情けなさ
男前 セクハラされちみろこたる
男前 両手に花で飲みおらす
見栄張って 門一杯の乗用車
見栄張って 後腹のくせ披露宴
光堀 善教
藤野 清子
小川 繁美
田尻 浩風
狩野 本六
須藤 新生
高木 房恵
田中 孝幸

せせらぎ俳句会

9月例会

虫の声ひとり占めして仕舞風呂
独りには淋しき深し無月の夜
豊作願ふ棚田の村の案山子シヨ一
山査子の実も色づきて庭らしく
紅白の玉の飛び交ひ天高し
海鳴りや逝く夏惜しむ奄美島
祭髪結はれそぞろに出掛けをり
つんむき芋てふ肥後弁も佳し衣被
朝の風秋が来たこと告げている(中三) 渡辺一史
蟻たちにかつがれていく赤とんぼ
(中三) 渡辺大寿

肥後狂句水笑会

9月例会

困つとる ドングリばかりあてがわれ 続 義昭
困つとる 俺より早う鳥が食う 柏原 乗仏
よか知らせ 表彰もんぞ三人目 井手 水光
立ち止まり あたり見い見柿ちぎり 御手洗三代
立ち止まり 自分史づくりうったたす
入院中 神棚さんなちかがつれ 吉岡 三水
入院中 偲んでこらす二号さん 神尾 迫水
平井 江彩

七城短歌会

9月詠草

困つとる 辞任辞任でなんぎやって 宮上 美由
待ってます 温泉行きは何時だろか 中島 五女
立ち止まり 珍しゅうなつた馬ん糞 山隈 好茶

旭志文芸俳句会

9月詠草

夕立や一千両の涼もらふ 水谷 ミネ
百歳の師より残暑の返受くる 東 芳子
山はるか穂孕み始むる青田かな 芹川 蓉子
新涼の気配づきし今朝の風 芹川のりこ
俄か雨我が家の近くに虹三すじ 郷 ミヤ子
遠雷や稲妻のみが夜半走る 出田みとり
茗荷の子添へて昼飼の冷奴 中尾ヨシコ

泗水短歌会

9月詠草

鈍き音たてて柿の実落つる時夕闇に去る命一つは 高藤タツノ
雀脅しのガス鉄砲の爆音が等間隔にひびく秋空 中山 定子
供華と切る高砂百合は香りなし夏日の花と白高く 長尾はるみ
牙ゆ リハビリのつもりで孫と音読し花丸二つ孫から貰 西 カオル
亡夫の忌の法事すませて仰ぐ空夏も過ぐるか空の 平嶋きくえ
碧さよ 稲の穂の出揃う田畦に青蛙真ん丸目玉が我を見て 宮本 峯子
いる 彼岸花土手にほつほつ頭出す地下より秋の彼岸の 大島 ひと
便り 台風の無事過ぎゆきし夜の床に寝待月かもしらじ 増田久美子
ら照らす 十年の何から語らむ亡き夫よ霊山鳥海の山に踏み 吉安 永子
入る

困つとる 辞任辞任でなんぎやって 宮上 美由
待ってます 温泉行きは何時だろか 中島 五女
立ち止まり 珍しゅうなつた馬ん糞 山隈 好茶
遠雷の音を静かに聞きながら今日は一人の淋しき
日暮れ 松岡ミチエ
くぐまりし我が背伸ばせとうからどち行きづり触
れくる手の暖かき 高木 精
朝戸開く庭に咲き初む夏水仙亡夫の病室に去年は
飾りし 吉間 充子
老人会潰れし残念今日敬老会あちこち積もる話に
花咲く 緒方 寛子
釣り銭の足りないような思ひして袋下げ持ちスー
パーを出す 村上 幾雄
忌日迫りアルバム捲り二人旅のハワイの追憶とめ
どもなくて 岩崎 照代
かけ襟をせむと縋り糸絹針にすなり通りて座り
直すも 下川 つぎ
庭畑は花と野菜の満ちみちて自給自足の己の生活
押し入れの前ゴソゴソと黒光る百足這いゐるて身が
退き疎む 森 道子
しつとりと朝に雨降る今までの猛暑の日々を詫び
いるように 斉藤 芳子